



今号よりスタートの「詩味礼讃 好詩家たちの対話」は、ナビゲーターである詩人のマーサ・ナカムラさんとゲストとの歓談を通して、詩の味わいや、味わい方の多様さを探っていくという連載です。第一回は新進の詩人・小島日和さんにお越しいただきました。

### 詩との出会いは学生時代

マーサ 今回、対談をするにあたって小島さんの詩集『水際』を読み返してみたのですが、ますます調がある種の特徴になっていっていると思いました。丁寧語というのは、相手を思いやるとか、物腰が柔らかいといったイメージがある一方で、小島さんのですます調には暗に「しななければならない」と言われているようで、雁字搦めにされていくような、サディスティックな怖さがあるなあと。

タイトルにある「水」は、私にとっては何かを清めるイメージが強いです。けれども、詩の中で語り手や主軸となる人物のまわりにある水は、吐瀉物や魚の

煮汁、お風呂の水など、基本的に濁っている。それが不安や困惑を象徴しているようで、「混濁する水と困惑する自分」といったイメージにつながり、私にとってはそれが新しいと感じました。

私自身、これまでにいろいろな詩を読んできましたし、自分でもある程度は詩を書いてきましたが、小島さんほど自分が考えていること、追いかけているもの、抱えている不安や戸惑いを、摺んで最後まで離さない人というのは珍しい。それができるのはすごいことだと思いますし、こういった詩を書けるようになる以前は苦労や悩みの多い日々だったのでないかと、勝手に想像してしまいました。小島さんが詩を書き始めたのは、いつごろですか？

小島 大学四年生のときです。二〇一九年の春、大学の授業で書き始めました。

マーサ 私も、詩を書き始めたのは大学の授業がきっかけです。

——お二人とも早稲田大学のご出身ですよ。それぞれ、どなたが詩の先生だったのですか？

小島 私の場合は、伊藤比呂美先生です。

マーサ 私は蜂飼耳先生でした。私は二〇一四年卒、

小島さんは二〇年卒なので、六年違うんですね。なぜ、詩の講義(演習)を取ろうと思ったんですか？

小島 私が四年生のとき、伊藤先生は早稲田に来て二年目だったんですけど、一年目から先生の演習は面白いと話題になっていたので、私はサークルで演劇にもかかわっていて、そこで一緒だったメンバーにも演習を取っている人が何人もいました。でも私は「あの世界には入っていけない」と、少し怖くて。小説や詩などの文芸創作の講義に対しては、何かこんがらがったコンプレックスみたいなものがあつたというか、興味はあるけど自分にとっては手の届かない別世界のよりに思っていたんです。それでも、四年生になったときに、最後まで何か取っておこうと、思い切って伊藤先生の演習を受けることにしました。

マーサ 先日図書館に行ったら、ヤングアダルトの棚に『詩人になりたいわたしX』(エリザベス・アセヴェド作/小学館)といったタイトルの本があつて、いまの中学生でも詩人になりたいと思う人がいるんだと思ったのですが、詩というものは書こうと思ってもなかなか書けるものではありませんよね。小島さんが初めて書いたときは、どんな感じでした？ スラスラ書けま